

## 【国際シンポジウム報告】

国際シンポジウム「民族社会の基礎構造—日本・中国・韓国の比較研究—」に出席して  
吉沢 四郎

「村研通信」191号に掲載された上記の国際シンポジウムが、1998年11月19日から21日の3日間にわたり、早稲田大学国際会議場で開催された。研究会のはじめから参加し、シンポジウムでは、司会者、討論者として参加した一人として、シンポジウムの感想を述べたい。

最初にこの国際シンポジウムの経緯について触れる必要がある。1991～93年にわたり青井和夫（前東大教授）を代表者とした「中国都市・農村の社会変動に関する実証的研究」（科研費国際学術研究）が行われ、その成果は『中国の産業化と地域社会』（東大出版会、1996年）にまとめられた。この調査研究の農村班のリーダーが柿崎京一会员（早稲田大学教授）であり、中国側共同研究者代表は陸学芸教授（中国社会科学院社会学研究所長）であった。この研究過程で、柿崎会員は村落、家族などわれわれが日常的に用いる社会学の基礎概念が、日本、中国で異なることに着目し、かねて親交のあった韓国ソウル大学金一鉄教授らとの共同研究「民族社会の基礎構造—日本・中国・韓国の比較研究」を構想するに至った。

この国際共同研究は1995～96年に科研費（国際学術研究、代表者柿崎京一）と1997～99年に科研費（国際学術研究、代表者矢野敬生）、国際シンポジウムについては早稲田大学の補助金を受けている。共同研究者は研究協力者を含めて日本側は柿崎会員

外11名、中国側陸学芸教授外6名、韓国側金一鉄教授外5名 という構成で取り組んだ。

さて、シンポジウムは柿崎京一の基調報告「民族社会比較研究の意義と方法」に始まった。柿崎は比較研究の出発点に有賀喜左衛門のいう「諸民族の文化はすべて価値ある特色を持っていることを正しく評価」し、「各民族の個性的な文化伝統を相互に尊重しあって、より大きな連帶関係を自覺的に結ぶこと」におき、比較の方法として、行為の背景の核心部分にあたる意味論理、すなわち相手の視点を理解すること、そのため生活に密着して生活や言動を詳しく観察・調査・解釈し説明すること、具体的には① 対象を小規模に設定し、② 象徴と意味の体系の相対的顕在的な村落を対象に、社会構成の基本となる要素の理解、概念の整理を行う、ここでは社会構成の基本となる要素を、（1）家・家族・同族・宗族、（2）土地・労働、（3）信仰・地域統合としたことを明らかにした。

テーマセッションⅠ（家・家族・同族・宗族）では、韓国（紙巾の関係で報告者氏名を省略させていただく）が忠清南道の桃李里をフィールドに、宗族マウルを解明し、宗族が伝統社会の重層的な父系親族集団のなかで核心的な役割を果たす血縁団体であるが、祭祀という装置を通じて永続化する、そのために宗契を設け、門中を組織化することを明らかにした。またそうした宗族マウルにおいても家族生活と儀礼にキリスト教の導入と共に儒教式祭祀の変化が見られることが報告された。中国は韓国・日本のように調査地を特定の村に限定せず、河北省の2つの村の家族調査であったが、どの一家子が村の権力を掌握し、郷鎮企業を支配し、利益を上げるか、そのすさまじい権力闘争の報告であり、かって細谷昂が「沸騰する農村」といった現代農村の姿を明らかにした。日本は長野県富士見町瀬沢新田集落をフィールドに日本の家と同族を解明したもので、家は家産に基づく家経営体であり、また生活集団であり、家の担い手は家長を中心に、近親者、非親族関係者を含むものであった。そして家経営の最大の目的は家の系譜的連続であった。また新田開発地のここでは土地資源の制約から強力な同族は形成されなかったが、小集団の同族が形成されたことが報告された。

テーマセッションⅡ（土地・労働）では、韓国の宗族マウルの土地所有が、農地改革、朝鮮戦争、そして1980年代の干拓事業によって大きく変化したが、宗中所有の土地は小規模とはいえ保持されており、またそうした変化の中で門中と住民の間の温情主義的関係も弱められているが、経済活動に伝統的な要素が再活用される、たとえば親族関係は、市場と組織という2つの領域を結んでくれる中間的組織形態（hybrid）の性格をもつとし、その具体例に老齢化と労働力不足の中で親族的要素がでてくるブマシ（結い）をあげている。中国は土地問題の核心は所有権にあり、人民公社制度の解体後採用された責任生産制は、土地の所有権と使用権を分離したもので、時代を画する壯拳として評価し、その後農業生産の発展、郷鎮企業の発展、私業企業・個体経営戸の発展、農村労働力の移動（民工潮）によって、中国農村の階層分化が進展しており、農村再組織化の過程で農村の権力という要素が決定的作用をしていることを明らかにした。日本は瀬田新田集落の農家の詳細な分析から、水田農業と商品作物栽培、それに冬稼ぎから通勤兼業が一般化したなかにあっても、消防団、区長、町会議員などの「村づとめ」が村内から期待されたときは、家経営の効率性よりも「村づとめ」を優先しており、労働力も「家」とう私的セクターが占有するものではなく、「村落」という社会が共有する性格をもっており、この要因は家の定着性の高さにある説く。またこうした村の社会構造を基礎付けたものとして水利組織をとりあげ、

その活動が内部的には秩序的な用水利用を可能とし、同時に村民に共同を規範化したし、対外的には組合の権利を守り、村落の内部の結束を強めたことを、豊富な資料によって明らかにした。

テーマセッションⅢ（信仰・地域統合）では、韓国で一般に門中祭祀（忌祭、茶礼、時祭）は、宗族集団が儒教的血縁秩序を確立し、それに基づいて宗族集団の結束を図ろうとするもので、宗族集団の統合に機能するもので、マウルの統合に寄与するものではない。しかし桃李里における忠壯公南以興將軍崇慕式のように血縁的排他性から脱して統合的住民関係を指向すとき、マウルの範囲を超えて地域社会レベルへと発展することが可能であることを示している。中国は国家公有制下の中で黒竜潭の人々の儀礼活動から民間公有化がどう進められているかを分析したもので興味深いものであったが、地域統合という課題に直結したものではなかったので、韓国と対照的に祭祀が地域統合のシンボルとして機能している村氏神を解析した日本の報告をみよう。瀬田新田の祭祀の実証的分析から、社会的連関、空間的な意味でも、ムラは枠をもっており、ムラにおける生活諸関連がその枠のうちに遂行されており、自治的な行政機能としてのムラとそれと重複する祭祀構造とによって、この枠は支えられていることが明らかにされている。

討論の中で韓国の韓相福教授が、今回のシンポで印象に残ったことは三国の農村をとらえるキーワードが韓国は宗族であり、日本はムラであり、中国は経済であると指摘したのは興味深い。日本・韓国が特定村落のインテンシブな調査であったのに、中国が複数の村落を対象に論点を提示したことなどアプローチに異同があったが、シンポジウムに際し、中国語、韓国語、日本語の報告要旨集を刊行すなど、相互理解に十分に配慮した事務局の労は、これから研究成果の取りまとめに大きく貢献するだろう。

( shirosi@tamacc.chuo-u.ac.jp )